

令和 3 年 5 月 24 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00277

研究課題名(和文) 近世日本における忍者像の形成と変容に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Formation and Transformation of the Ninja Image in Early Modern Japan

研究代表者

吉丸 雄哉 (Yoshimaru, Katsuya)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：10581514

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の近世において史実の「忍び」から虚像の「忍者」像がどのような過程で形成され、また変容して現在に至ったのかを小説や芸能や軍書によって解明したものである。忍者の黒装束・黒覆面に手裏剣といったイメージの成立のほか、飛加藤・石川五右衛門という忍者が誕生するまでを明らかにし、さらには近世に編まれた軍書では執筆された当時の忍者観や戦争観にもとづき、中世における忍びの運用が描かれていることを明らかにした。研究成果のほとんどは『忍者の文学史』(KADOKAWA)として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究がなされる前の忍者研究は事実面の探究を中心に成されていたが、実際には真偽のあやふやな二次資料をもとに虚構の忍者像を史実の忍びとみなして論じてきた。本研究が忍者が後代に記述されていくなかで、創作的要素がどのように入っているのか明らかにしたことで、忍者の文学史が大きく更新されるとともに、歴史的な忍者研究における一次資料の重要性が認識されるようになり、忍者学がより高次の段階に大きく前進したといえる。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the process by which the virtual image of 'Ninja' was formed from the historical fact of 'Shinobi' in the early-modern times of Japan, and was transformed to the present day through novels, performing arts, and war books. In addition to the establishment of the image of ninja with black costume, black mask and shuriken (throwing star), it revealed the birth of ninja 'Tobi KATO' and 'ISHIKAWA Goemon', and furthermore the war book edited in the early-modern times described the operation of ninja in medieval times based on the view of ninja and war written in those days. Most of his research results have been published as "The History of Ninja Literature" (KADOKAWA).

研究分野：近世文学

キーワード：忍者 江戸時代

1. 研究開始当初の背景

現代では、日本を代表する表象のひとつに忍者はなっている。その忍者に関する研究は大正・昭和戦前の伊藤銀月、戦中・戦後の藤田西湖、昭和30年代以降の奥瀬平七郎らによって主に歴史方面から進められてきた。しかしアカデミズムからではなく民間からの研究であるため、さまざまな問題があった。忍術書をベースにした忍術の紹介と引用する資料の価値を考慮しない資料引用の方法である。前近代に記された書物はすべて正しいという、批評性が欠如した状態で行われる研究では到底忍者の実像をつかむことなどできず、むしろ作られた忍者像を真実の忍者として崇める結果を生み出した。その後も『歴史群像』や『歴史読本』といった商業誌は先行研究を無批判に再生産するだけでなく、読者の目をひく妄説や奇説を積極的に紹介したことによって、2010年頃まではすっかり作られた忍者像が広まっている状態だった。

忍者の史的研究が不確実な書物、不正確な考証にもとづく精度の低いもので、結果としてフィクションにもとづく忍者像を生成していたにもかかわらず、世間に流布する小説・芸能・漫画・映画などの忍者を虚構であるという理由で等閑視してきたことは滑稽だが、往時の忍者研究の現実であった。足立巻一が立川文庫の研究を行い『立川文庫の英雄たち』を残しているのが、虚像の忍者に関する少ない研究のひとつである。

曖昧であった忍者研究が検討に足る精度の高いものになったのは、2010年代から『伊賀市史』『甲賀市史』『三重県史』が編纂刊行されるようになったほか、2012年に磯田道史、藤田和敏により忍者研究の書籍が刊行され、同年には三重大学が伊賀連携フィールドを設置して、忍者研究を開始した。三重大学の関係者が多く研究に携わり、報告者も『忍者文芸研究読本』(2014)、『忍者の誕生』(2017)の編纂に関わったほか、山田雄司『忍者の歴史』(2016)同『忍者の精神』(2019)、高尾善希『忍者の末裔』(2017)などが刊行された。2017年7月に三重大学国際忍者研究センターが開設され、2018年2月に国際忍者学会が設立された。学術誌である「忍者研究」誌が2018年8月に創刊され、現在3号までが刊行されている。本申請研究は2018年から開始しているが、研究満了の2021年3月までにも日進月歩で研究が進んだ分野だといえる。本研究はこれまで手薄であった文芸や演劇における忍者像を考察することであったが、戦国時代における忍びの活動について明らかにした平山優の研究「これは『戦国の忍び』(2020)に結実した」は同時に進んでいた本研究にも大きな影響を与えている。

2. 研究の目的

本研究は文芸や演劇を通してつくられた忍者の考察を研究の主目的としていた。虚構の忍者像について、黒装束の発生と定着の過程、手裏剣の利用するようになった経緯や、忍術をつかった悪人として類型ができていく過程を、それぞれの忍者作品を詳細に検討することであきらかにすることを目的としていた。そのための基礎的研究として、「忍者関連主要作品年表(江戸時代)」の大幅な増補を行うことも目標に入れていた。

忍者像が発生し徐々に現在に近い形に変容していった近世の資料を徹底的に搜索し、忍者の出てくる話を集めることで、従来よりも深い考察を行うことを想定していた。結果として、時代ごとに変容していく忍者像を丹念に追うことで、日本文化の精神を代表する忍者の基底をあきらかにし、その価値と魅力を発見することを目的としていた。

3. 研究の方法

基本的に小説では仮名草子・浮世草子・読本を主とし、演劇では歌舞伎と人形浄瑠璃を調査対象とし、そこから忍者の登場例を広く収集し、その考察を行った。考察にあたっては、近世につくられた忍者像を「忍術をつかって大事なものをとって戻ってくる忍者」「超自然的な忍術をつかってお家の乗っ取りなどを謀る忍者」「軍記に登場して忍びの活動を行う忍者」に分類し、それに従って収集する用例の系統を分けた。細かく用例を拾った。に関しては、代表的な作られた忍者として代表的な「飛加藤」「石川五右衛門」を大きな調査対象とし、は数々の近世軍記のほか『太平記評判秘伝理尽鈔』を対象として用例を集めることにした。

4. 研究成果

本研究成果のほとんどは『忍者の文学史』(KADOKAWA、ISBN 978-4-04-703623-9)に収めてある。『忍者の文学史』に収められなかった研究成果をまず報告する。

まず、芭蕉忍者説について読売新聞伊賀版「忍び学でござる！」に2017年12月3日、2018年4月8日、2018年7月8日、2018年7月15日、2018年10月14日、2018年12月16日、2019年4月7日、2019年10月27日まで8回に渡って考察を掲載した。山田雄司編『忍者学講義』に「芭蕉忍者説を疑う」(73~87頁)として収録されている。考察内容は次の通りである。芭蕉忍者説は松本清張・樋口清之『東京の旅』(光文社、1966)が初出で、尾崎秀樹ら大衆文学研究者が広めたほか、斎藤栄『奥の細道殺人事件』(1970)など、芭蕉忍者説を利用した推理小説によって、内容が細かくなっていった。しかし、芭蕉の父親は忍びでも侍でもなく農民であり、忍術を学ぶ必要も方法もなかった。脚力も当時の平均的な男性と同じであり、おくの細道の旅でも

驚くほどの健脚ぶりは見せていない。旅先から手紙をよく出しており、隠密の旅ではなかった。また、健脚や姿を消すといった忍術をつかった話が芭蕉にまったくないのも芭蕉が忍者でなかった証拠である。芭蕉忍者説は虚説であるが世に広まっているため、今後も知的な忍者を出すときに芭蕉を参考にした忍者が登場するだろう。

国際忍者学会（2018年9月8日）で発表した「海外テーブルトークロールプレイングゲームにみる忍者受容」など、アナログ忍者ゲームの考察は、2020年1月26日、2020年5月3日、2020年8月30日、2020年12月20日、2021年4月25日と行われ継続中である。アナログゲームの特徴を「ルール」「背景世界」「コンポーネント」「ゲーム文化」の四つの切り口から考察したものである。大正期の忍術双六や昭和のパーティーゲームやボードシミュレーションゲーム、海外のテーブルトークロールプレイングゲームを対象として論じている。将来的には『忍者学講義』の続刊にまとめて収録される予定である。

全国図書館大会講演「忍者研究の最前線から地域と図書館を考える」（2019年11月21日）は最新の忍者研究事情とそれによって何が新たにわかったかの解説を行ったほか、図書館と忍者との関わりについて、「忍者のキャラクターを生かしたもの」「人集めのイベントに忍者をつかったもの」「図書館所蔵の資料をつかった忍者本の展示」「図書館所蔵の資料をつかった忍者研究」について話をした。講演内容は『第105回全国図書館大会三重大会記録』（2020年3月）に収録されている。2020年11月21日には会場の三重県文化会館で「史料にみる忍者の諸相」展を行った。三重大学附属図書館で同様の展示である「伊賀と忍者展」（2019年6月20日～2019年8月22日）を行い、展示図録は三重大学情報ライブラリーセンターの「研究開発室」活動記録から確認できる。

本研究期間で行った研究発表および講演会である、韓国日語日文学会「絵入本にみる忍び装束の発生と定着」（2018年12月16日）、三重大学伊賀連携フィールド2018年度後期市民講座「戦後忍者小説史概説」（2019年3月16日）、国際忍者学会研究会「創作における忍者の技芸伝達」（2019年12月21日）、三重大学伊賀連携フィールド2020年度前期市民講座「石川五右衛門について知っておくべきいくつかのこと」（2020年8月22日）に関しては、成果をすべて『忍者の文学史』に反映させている。

また「忍者関連主要作品年表（江戸時代）」は三重大学人文学部ホームページの伊賀連携フィールド「忍者関係資料データベース」で公開する。

『忍者の文学史』は「飛加藤」「石川五右衛門」「仮名草子・浮世草子の忍者像」「忍者装束の発生と展開」「忍術と妖術」「太平記の忍び」「軍記の中の忍び」「猿飛佐助と真田十勇士」「忍者作品史概説」の章からなり、原稿用紙に換算して600枚程度の分量である。江戸時代において史実の忍びがどのようにして架空の忍者へと成長していったか、また一見すると事実のように書かれている軍記において忍者がどのように描かれているかを明らかにしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 吉丸雄哉
2. 発表標題 忍者研究の最前線から地域と図書館を考える
3. 学会等名 全国図書館大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉丸雄哉
2. 発表標題 創作における忍者の技芸伝達
3. 学会等名 国際忍者学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉丸雄哉
2. 発表標題 海外テーブルトークロールプレイングゲームにみる忍者受容
3. 学会等名 国際忍者学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉丸雄哉
2. 発表標題 絵入本にみる忍び装束の発生と定着
3. 学会等名 絵入本学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉丸雄哉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 376
3. 書名 忍者の文学史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------